

弥生末から古墳時代前期(3世紀～4世紀) 邪馬台国から日本の国家形成の時代

「鉄」で栄えた近江の中心都市集落「彦根市稲部遺跡」訪問記 2016.10.22

琵琶湖交通・北陸や美濃・尾張・伊勢など東日本と畿内をつなぐ交通の重要な結接点

近江の彦根から纏向遺跡に匹敵する大型建造物のある鉄器物流を担う拠点都市集落が出土



「邪馬台国時代の近江の大都市集落出土」と大きく新聞報道された彦根市「稲部遺跡」 2016.10.18

琵琶湖交通・北陸や美濃・尾張・伊勢など東日本と畿内をつなぐ交通の重要な結接点

近江の彦根から 纏向遺跡に匹敵する大型建造物のある鉄器物流を担う拠点都市集落が出土

邪馬台国の時代 鉄で栄えた近江の大都市集落稲部遺跡」訪問記

1. 【遺跡概要解説】邪馬台国の時代 鉄で栄えた大都市集落 滋賀県彦根市「稲部遺跡」
2. 平成28度稲部遺跡 現地説明会資料 2016.10.22. 彦根市教育委員会
3. 稲部遺跡 第6次・第7次発掘調査現地説明会
 - 3.1. 第6次調査域 稲部遺跡の中心部【1】祭祀の区画・大型建物 ほか
 - 3.2. 第7次調査域 稲部遺跡の中心部【2】 方形区画と大型建物と鍛冶工房群
 - 3.3. 発掘調査域から出土した遺物 日本各地の土器片 & 鍛冶関連遺物
 - 3.4. 今回の6次・7次 調査まとめ ?現説資料まとめの整理転記◇
- 参考 1. 荒神山と荒神山古墳と稲部遺跡
- 参考2 稲部遺跡に先立つ大型建物や巨大祭祀空間のある 巨大集落遺跡「伊勢遺跡」
- 参考 3. 淡路島五斗長垣内遺跡にみる弥生時代の鉄器生産
淡路市教育委員会 伊藤宏幸氏講演 より
4. まとめ 稲部遺跡 発掘調査 平成28年現地説明会に参加して by Mutsu Nakanishi

卑弥呼の時代にヤマトと琵琶湖交通・東国を結ぶ結節点近江に「大和の纏向遺跡に匹敵する大型建物を持つ鉄の物流拠点とみられる都市集落(彦根市稲部遺跡)」が出土。10月22日現地説明会が開かれた。

巨大都市集落の中核の大型建物のすぐそばに、幾棟もの鍛冶工房群(竪穴住居群)が、繰り返し継続して存在。

「日本の国造りのkeyは鉄」と言われながら、それを実感できなかったが、都市の中心部にこんなに鍛冶工房が林立する姿を見るのは初めてです。

鉄器物流を担う近江の拠点集落集落まさに「鉄が主役」。初期ヤマト王権に組み込まれた後も、畿内と東国・北陸を結ぶ拠点として、更に勢力を伸ばしていった近江の大勢力の拠点とみられる。卑弥呼の日本の国造りの時代に、ヤマトと結び、鉄の流通拠点を握った近江の巨大都市集落。鉄が主役の都市。日本の国造りにどんな役割を演じていたのか? この巨大都市の中核でどんな鉄器生産が行われていたのか? まだ、調査は始まったばかり。今後の検討がうれしい遺跡です。



ポットが置かれている場所が大型建物柱穴。鍛冶工房跡も含め、数多くの建物跡が重なり合っており出土。卑弥呼の時代・交通の要衝近江で栄えた鉄の物流拠点都市彦根市稲部遺跡 2016.10.22現地説明会



第七次調査域と並立した六次調査区 稲部遺跡の中心部【I】

すでに埋め戻されている南そして大溝の北の竪穴住居群に取り囲まれて、倉庫・儀礼施設と考えられる大型建物遺構が出土



方形区画内大型建物とともに鍛冶工房群が出土した第七次調査区 稲部遺跡の中心部 II
纏向遺跡の超大型建物に匹敵する超大型建物が出土 鉄交易の拠点都市集落の居館城とも考えられる

稲部遺跡 今回現地説明会が開かれた調査区域(第6次・第7次)

2016.10.22.

【遺跡概要解説】

1. 邪馬台国の時代 鉄で栄えた大都市集落 滋賀県彦根市「稲部遺跡」

弥生時代終末から古墳時代初め（3世紀前半）の鉄器工房群の遺構出土
交通の要衝「いなべ国」 「日本の国の成り立ちを考えるうえで貴重」

2016.10.18. 毎日新聞記事より



滋賀県彦根市教委は17日、市内の「稲部遺跡」（同市稲部、彦富両町）で 弥生時代終末から古墳時代初め（3世紀前半）の鉄器工房群の遺構が見つかったと発表した。

同時代では他にない規模という。大規模な建物の跡も確認された。

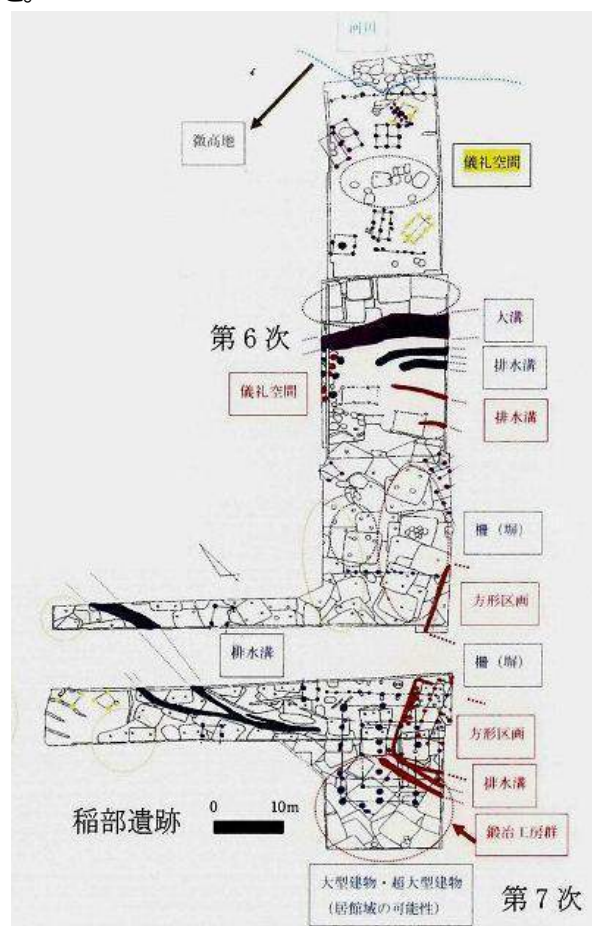
当時、鉄製品の原料は大陸からの調達に頼っており、同時代の邪馬台国について記した中国の史書「魏志倭人伝」で、大陸と交易があったとされる「三十国」のうちのひとつともみられるという。

鉄器工房は30棟以上ある竪穴建物群で、各棟は一辺3.5～5.3メートルの方形。うち23棟の床面から鉄片や鉄塊が見つかった。一部に土なども含んだ状態だが、全体の重さは計約6キログラムに上るといふ。

同時に鍛冶や鉄を加工する際に使ったと思われる台石や、鉄製矢尻2個なども見つかった。

国内には当時、製鉄技術がなく、鉄の延べ板を朝鮮半島から取り寄せ、武器や農具、工具を造っていたと考えられる。

一方、鉄器製造が始まった直後に大型の建物が現れた他、鉄器製造が終了した3世紀後半には、一辺十数メートル規模の大型の建物2棟が相次ぎ出現。首長の居館や巨大な倉庫として利用され、他の国との物流拠点だった可能性があるとされている。



邪馬台国畿内説の有力候補地とされる纏向(まきむく)遺跡(奈良県桜井市)では、より大規模な同時代の建物跡が確認されている。「魏志倭人伝」では、倭人は現在の韓国・ソウル辺りにあった帯方郡の東南の

大海の中にいて、もとは「百余国」あったが、同書が書かれた3世紀には「使訳(使者や言葉)通ずる所三十国」と伝えられている。

福永伸哉・大阪大教授(日本考古学)は「稲部遺跡は東西日本の結節点にあり、近江勢力の大きさを物語ると共に日本の国の成り立ちを考えるうえで貴重」と話す。

今回の発掘調査域概要 (現説資料より)



大型建物イメージ図 (現説資料より)

一部資料を整理していますが、全文は下記インターネット内にあります
彦根市 <http://www.city.hikone.shiga.jp/0000009271.html>

1 はじめに

彦根市教育委員会では、彦根市稲部町・彦富町において稲部遺跡の発掘調査を実施しました。この調査は、市道芹橋彦富線道路改良工事に関わる調査で、稲部遺跡としては6回目と7回目の調査となります。第6次調査区は、独立棟持柱建物、井戸、金属器工房からなる儀礼空間の南側に位置し、第7次調査区は、密集する竪穴建物群と方形区画が確認された第3次調査区の南側に位置します。調査期間は、第6次が平成27年6月～平成28年3月、第7次が平成27年11月から開始し、現在調査中です。調査面積は、第6次が1042.33㎡、第7次が430.37㎡です。

2 調査地の位置と環境

調査地は標高約90.00m前後の旧愛知川の微高地上にあたります。微高地の北には旧愛知川である文禄川が、やや南には同様に旧愛知川である来迎川が流れています。周辺では弥生時代後期から古墳時代前期の遺構が密集して分布しています。

稲部遺跡と稲部西遺跡を含む稲部遺跡群は、昭和56年（1981）の宅地造成工事に伴ってはじめて調査されました。その後、平成25年（2013）から開始された市道改良工事に関わる調査において独立棟持柱建物、大型建物、方形区画、金属器工房などが発見され、現在までに180棟を超える竪穴建物が検出されていますが、第6次調査で大型建物3棟が、第7次調査で大型建物2棟、超大型建物2棟、大規模な鍛冶工房群が確認されたことにより、稲部遺跡群の全体的な遺構の変遷が明らかとなりました。また、稲部遺跡群調査指導検討会（平成28年9月7日開催）における調査成果の審議を経て、稲部遺跡群が、弥生時代から古墳時代にかけての日本の国家形成期を考える上で極めて重要な遺跡であると評価されています。

3 調査の概要

(1) 第6次調査

大型建物3棟を含む掘立柱建物6棟以上、竪穴建物20棟以上、排水溝4条、大溝1条などを検出しました。

倉庫・儀礼施設とみられる大型建物3棟（23.80㎡以上、30.70㎡以上、推定50.60㎡の独立棟持柱建物）が弥生時代終末から古墳時代前期（3世紀中葉から後葉）にかけて連続して同じ場所に建てられる集落の中心的な儀礼空間です。儀礼施設や居館の可能性のある方形区画とほぼ同じ時期です。

大溝からは土師器とともに韓式系土器も出土しています。

(2) 第7次調査

鍛冶工房の可能性が高い竪穴建物23棟以上を含む竪穴建物30棟以上、排水溝2条、方形区画の一部である溝、塀の可能性のある柵列を検出しました。

弥生時代終末から古墳時代初頭（3世紀中葉）には、倉庫・儀礼施設や居館の可能性のある方形区画とその内側の大型建物1（独立棟持柱建物・43㎡）が出現し、方形区画の南側では大規模な鍛冶工房群で鉄器（鉄製武器や農具）生産が行われています。

その後、古墳時代前期前半から後半（3世紀中葉から4世紀）にかけて、方形区画を切ってさらに新しい大型建物2（63㎡）・超大型建物1（188㎡）・超大型建物2（145㎡）が柵（塀の可能性のある）を伴って

出現します。特に、超大型建物1は、^{まきむく}纏向遺跡（奈良県桜井市）第166次調査の超大型建物（238.08㎡）に次ぐ日本列島屈指の規模です。大型建物2・超大型建物1は、居館域の一部を構成する建物であり、超大型建物2は、王権の関与する巨大な倉庫である可能性が考えられます。

4 まとめ

○北陸や美濃・尾張などの東日本方面と畿内の大きな地域をつなぐ、地理的に重要な位置にある3世紀の近畿北部の中心的な遺跡です。これは、大和（奈良県）、伯耆（鳥取県）、越前（福井県）、湖南地域（滋賀県南部）、美濃（岐阜県）、尾張（愛知県）、伊勢（三重県）、東遠江から駿河（静岡県東部）の各地域の土器の出土からも各地からの交渉があり、交流の要、物流の中心地となっていることが裏付けられます。朝鮮半島の渡来人との関係を示す韓式系土器も出土しています。

○直径数百m、面積約200,000㎡、弥生時代後期中葉（2世紀）から古墳時代中期（5世紀）にかけて継続する巨大な集落です。

○青銅器の鑄造、朝鮮半島から運ばれた鉄素材をもとに鉄器の大規模な生産を行っており、大型建物・超大型建物や独立棟持柱建物という首長層が居住したり、儀礼に使用したと考えられる建物と区画が時代を経るごとに出現し、王権との関わりによって政治色を強めていく過程を示しています。

○祭祀都市・政治都市としての面を強く持ち、工業都市としての面もあわせ持つ近江の巨大勢力・クニの中核部であり、3世紀の国内屈指の遺跡です。

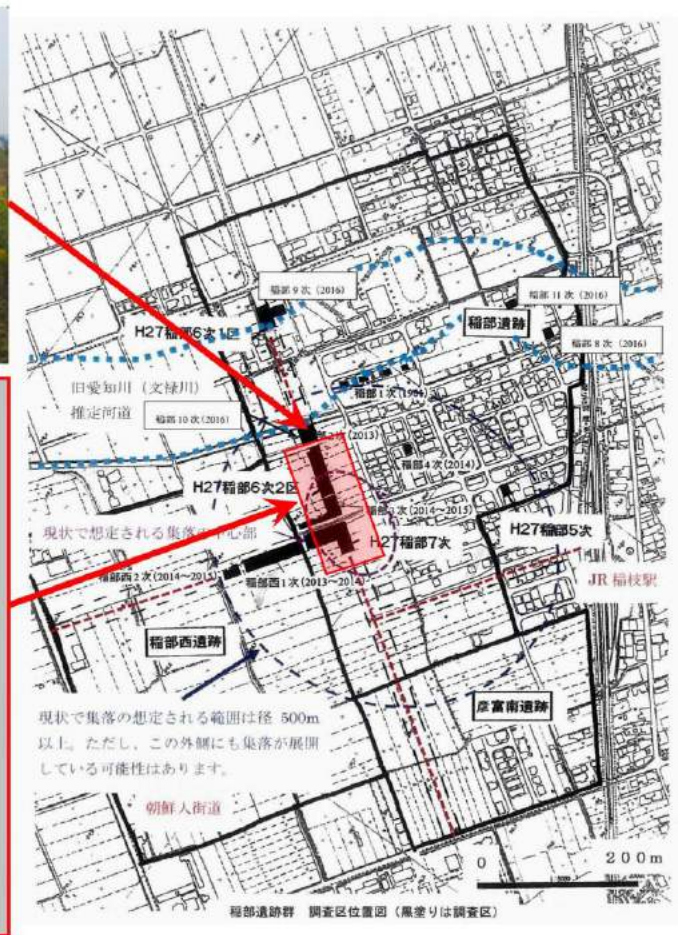
○3世紀前半を中心とするヤマト政権が成立しつつある時代、日本の歴史上でも非常に重要な時期の大集落です。日本列島における倭国の成り立ちを考える上で、今までにない極めて重要な遺跡です。

○3世紀の時代にとどまらず、4世紀から5世紀には、巨大倉庫の出現によって物流拠点として発展・継続し、韓式系土器（三国時代・3～7世紀の朝鮮半島南部地域から渡来人が持ち運んだり、すでに日本に住んでいた人々が朝鮮半島の土器をまねて作った土器）の出土から、朝鮮半島と交流し、当時の最先端技術を渡来人から導入していた可能性があります。

○ヤマト政権との関係を前提として、荒神山古墳の築造に関わる巨大勢力の本拠地である可能性を含め、荒神山古墳との深いつながりをもつ遺跡です。

○稲部遺跡では、縄文時代後期（今から4,500年前）から中世（今から500年ほど前）までの遺構と遺物が見つかっています。中でも、弥生時代後期中葉（紀元2世紀）から、古墳時代前期（4世紀）にかけての非常におおきな集落がみつかりました。これは、「ムラ」というよりも、むしろ「クニ」の中核部のような集落で、非常に学術的価値の高いものです。教科書にも載っている「魏志倭人伝」（中国の歴史書）が伝える「邪馬台国」とほぼ同じ時代の遺跡です。「魏志倭人伝」に書かれる「倭（日本のこと）」には、「邪馬台国」という大きな国があり、「卑弥呼」という女王がいた、と書かれていることがよく知られますが、その続きには日本の中に邪馬台国の他に魏と外交関係をもつ三十か国がある、とあります。その三十か国のうちのひとつが、稲部遺跡である可能性が出てきました。ただし、まだ遺跡全体の2割程度しか明らかになっておらず、周辺にはさらに重要な遺構が存在している可能性が高いものと考えられます。大型建物や超大型建物の上部構造、方形区画内の遺構の解明、鍛冶工房群の実態とその広がり、集落の構造などについてもさらに検討していく必要があります。荒神山古墳の築造背景や被葬者との関係についても大きな課題です。

発掘調査にあたりましては、関係機関、地元関係者の方々から多大なるご協力をいただきました。記して御礼申し上げます。非常に重要な遺跡の保護のため、更に周辺の調査を推進し、稲部遺跡群の構造や遺構の性格を明らかにしていきたいと考えております。



〈左側 写真部を追加し、ここにあった語句説明を省略〉

遺構配置図 (いこうはいちず)

(弥生時代後期中葉から後葉 2世紀) 竪穴建物による集落が形成。鍛冶工房1棟。多角形建物の居住域。

(弥生時代終末 3世紀初頭から前葉) 北端部に独立棟持柱建物、井戸、金属器工房からなる儀礼空間が形成。周溝付建物の居住域。

(弥生時代終末 3世紀前葉から中葉) 竪穴建物約60棟。方形区画の南側で鉄器生産が開始。北端部の儀礼空間は継続。

(弥生時代終末か) 操業は最盛期。倉庫

方形区画と儀礼空間(6次)が成立し、併存。集落内の機能分化・階層分化が顕著になり、首長層の台頭。

(古墳時代前期前半 3世紀中葉から後葉) 方形区画を切って大型建物・超大型建物(居館や倉庫の可能性)が柵(塙)による区画を伴って出現(7次)。ヤマト政権との関係によって、権力の増大と安定。

(古墳時代前期後半から古墳時代中期 4世紀から5世紀) 超大型建物が出現し、ヤマト政権下の物流拠点として機能。大溝の掘削と埴式系土器の出土。

稲部西遺跡

稲部遺跡

平成28年度 稲部遺跡発掘調査現地説明会資料

第7次



赤色：方形区画と大型建物1

水色：大型建物2

青色：超大型建物1

紫色：超大型建物2

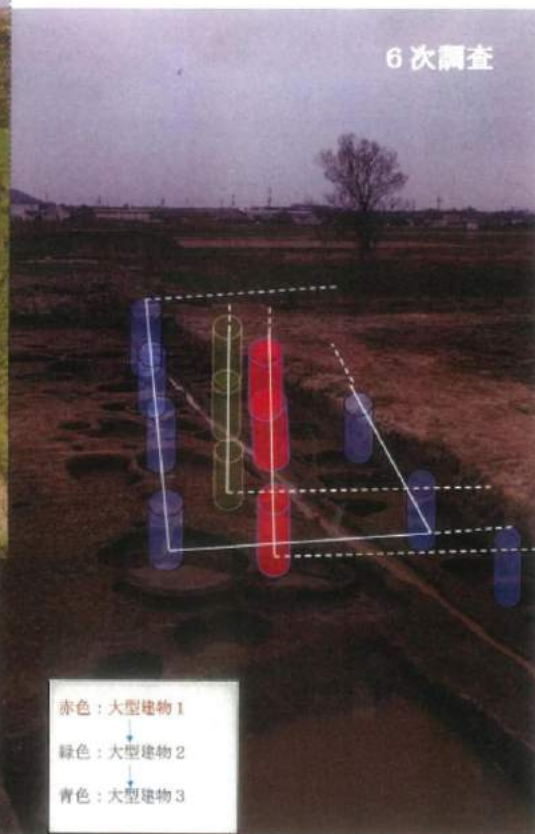
【7次調査】

方形区画・大型建物1 (弥生終末～古墳初頭・3世紀)
43 m² 榑持柱建物
大型建物2 (古墳前期前半・3世紀中葉～後葉) 63 m²
超大型建物1 (古墳前期前半・3世紀中葉～後葉)
188 m² 稲部遺跡で最大規模の建物
超大型建物2 (古墳前期前半以降・4～5世紀) 145 m²

【6次調査】

大型建物1 (弥生終末～古墳初頭・3世紀) 23.80 m²以上
大型建物2 (弥生終末～古墳初頭・3世紀) 30.70 m²以上
大型建物3 (古墳前期前半・3世紀中葉～後葉)
推定 50.60 m² 榑持柱建物

大型建物と超大型建物



赤色：大型建物1

緑色：大型建物2

青色：大型建物3



3世紀前半の東アジア
(大阪府立弥生文化博物館 1999『卑弥呼誕生』改変)

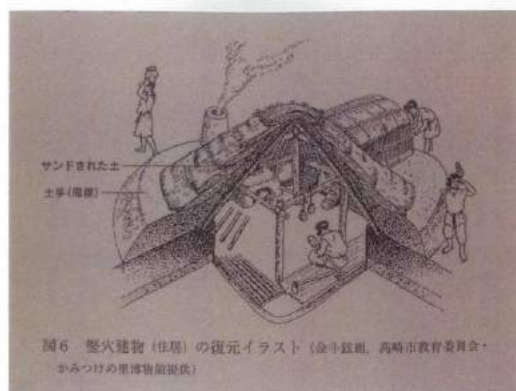


図6 竪穴建物(住居)の復元イラスト(金斗鼓組、高崎市教育委員会・からつかけ里博物館提供)

竪穴建物の復元図(若狭版 2015『東国から読み解く古墳時代』吉川弘文館)



サラワク族の鍛冶作業風景
(村上悠造 1999『倭人と鉄の考古学』青木書店)

1920年代のジャワ・スマトラ島に住むサラワク族の鍛冶作業風景です。

屋外で作業しており、ピストン(左)を吹く一人(左)がいて、その隣で三人(右)が鉋の傍で鍛冶の作業を行っています。二人は鑊で固定した石錠をふるい、金床石も鑊で固定され、緩衝材として木材の上に置かれています。鍛冶がほとんど掘りこまれていません。長い棒状の素材の先を加工したピンセット状の道具で挟んでいます。

弥生時代の石器主体の鍛冶具のあり方や鍛冶技術を考える上でとても参考になる民族誌です。工房の様子や作業空間など、当時の鍛冶技術はまだまだ分からないことが多く、民族誌を参考にした発掘調査成果の比較検討が期待されます。



下長遺跡(滋賀県守山市) 独立榑持柱建物の復元(滋賀県立安土城考古博物館 2009『大型建物から見てくるもの』)



下鍋遺跡(滋賀県栗東市) 独立榑持柱建物の復元(滋賀県立安土城考古博物館 2009『大型建物から見てくるもの』)

平成 28 年度 稲部遺跡発掘調査現地説明会資料

[illegible]

3. 邪馬台国の時代 鉄で栄えた近江の大都市集落「稲部遺跡」訪問記 2016. 10. 22.

第6次・第7次 発掘調査現地説明会 参加記録

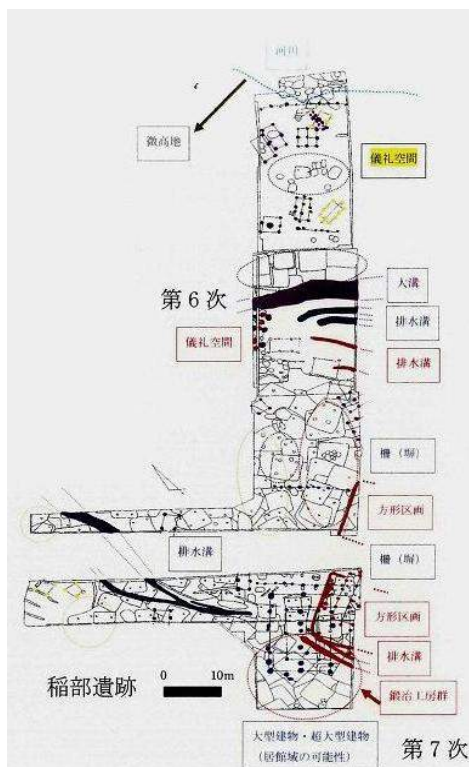
現地の写真を加えて 現地説明資料のまとめを整理転記し、まとめとした

稲部遺跡は標高約 90m 前後の旧愛知川の微高地上にあり、北には旧愛知川である文祿川やや南には同様に旧愛知川である来迎川流れ、周辺では弥生後期後期から古墳時代前期の遺構が密集して分布している。

伊部遺跡と伊部西遺跡を悪夢伊部遺跡群は 1981 年の宅地造成工事に伴う初めての調査。2013 年から開始された市道改良工事に係わる調査で独立持柱建物・大型建物・方形区画・金属器工房などが発見され、現在までに 180 棟を超える竪穴建物が検出されている。

6 次調査区は(すでに埋め戻されている)独立棟持柱建物・井戸・金属器工房からなる儀礼空間の南側に位置し、今回の第 6 次の調査で大型建物 3 棟が出土。7 次調査区は 6 次調査区に続くさらに南側 密集する竪穴建物群と方形区画が確認された第 3 次調査区(現在埋め戻され、小高い土手になっている)の南側に位置し、今回の 7 次調査で大型建物 2 棟 超大型建物 2 棟 大規模な鍛冶工房群が確認された。

これらの調査で稲部遺跡群の全体的な遺構変遷が明らかになり、この稲部遺跡群は弥生時代から古墳時代にかけての日本の国家形成期を考える上で極めて重要な遺跡と評価されている。



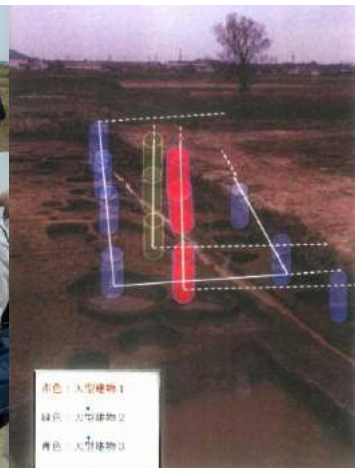
3.1. 第6次調査域 稲部遺跡の中心部【1】祭祀の区画ほか

大型建物 3 棟を含む掘っ立て柱建物 6 棟以上 竪穴建物 20 棟以上・排水溝 4 条・大溝 1 条などを検出。

倉庫・儀礼施設とみられる大型建物 3 棟 (23.80㎡以上・30.70㎡以上・推定 50.60㎡の独立棟持柱建物) が、弥生時代終末から古墳時代前期(3 世紀中葉から後葉)

にかけて連続して同じ場所に立てられる集落の中心的な儀礼空間。儀礼施設や居館の可能性のある方形区画とほぼ同じ時期。

大溝からは土師器とともに乾式系土器も出土。



3.2. 第7次調査域 稲部遺跡の中心部【2】 方形区画と大型建物と鍛冶工房群

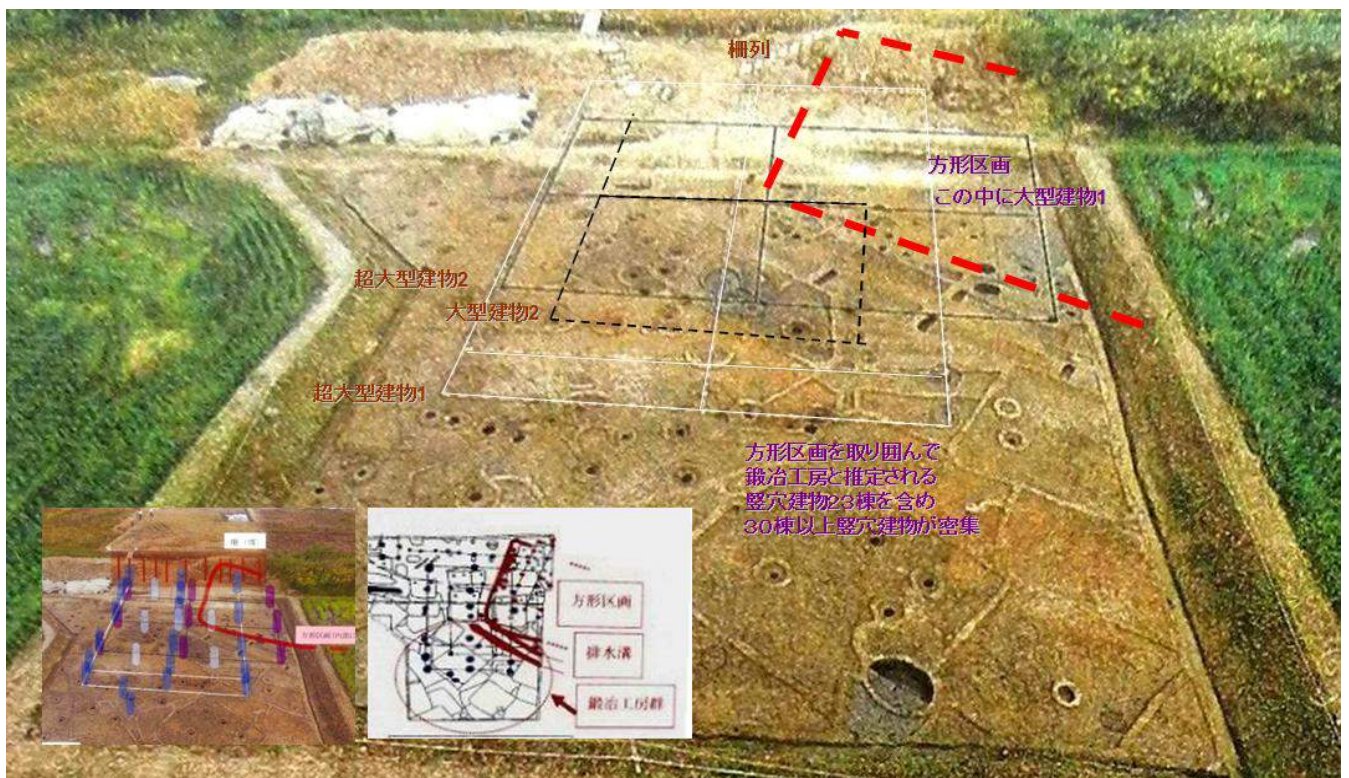


鍛冶工房の可能性が高い竪穴建物23棟以上を含む竪穴建物30棟以上・排水溝2条・方形区画の一部である溝、塀の可能性がある柵列を検出。弥生時代終末から古墳時代初頭(3世紀中葉)には、倉庫・儀礼施設や居館の可能性のある方形区画とその内側の大型建物1(独立棟持柱建物43m²)が出現し、方形区画の南側では大規模な鍛冶工房群で鉄器(鉄製吹や農工具)の生産が行われる。

その後、古墳時代前期前半から後半(3世紀中葉から4世紀)にかけて、方形区画を切ってさらに新しい大型建物2(63m²)・超大型建物1(188m²)・超大型建物2(145m²)が柵(塀の可能性もある)をともなって出現。

特に超大型建物1は纏向遺跡第166次調査の超大型建物(238.08m²)に次ぐ日本列島屈指の規模。

大型建物2・超大型建物1は居館域の一部を構成する建物であり、超大型建物2は王権の関与する巨大な倉庫である可能性が考えられる。



稲部遺跡 第7調査区

鍛冶工房が密集して存在した弥生時代終末から古墳時代初頭(3世紀中葉)と

大型建物・超大型建物があつた古墳時代前期前半から後半(3世紀中葉から4世紀)時代

二つの時代が重なるので、現説資料より整理して 空からの写真にプロットして見やすしてみました。 少し見やすしました。



弥生時代終末から古墳時代初頭(3世紀中葉)には、方形区画の内側に(独立棟持柱建物43m)である大型建物1が出現し、方形区画を取り囲む南側では大規模な鍛冶工房群密集して存在し、で鉄器(鉄製炊や農工具)の生産が行われていた。都市集落の中核部に多数の鍛冶工房。当時大陸・朝鮮半島から手に入れた鉄素材をここで鉄器加工して、日本各地に供給したと推定される。まさに国造りの権威の象徴が「鉄」と言われた時代を象徴する光景だと思える。

でも 全くこの鍛冶工房群からは鍛冶炉が出土しておらず、どんな鉄器加工・鉄器生産が行われていたか? 今、それらを路することはできない。これからの重要な課題であろう。

そして、古墳時代前期前半から後半(3世紀中葉から4世紀)にかけて、ヤマト王権が日本各地の国を取り込み国家形成を図る時代になるとこの稲部では、集落の中心部にあった鍛冶工房群に替わって超大型建物が建つ時代に。稲部遺跡はますます栄えてゆく。 方形区画を切ってさらに新しい大型建物2(63m)・超大型建物1(188m)・超大型建物2(145m)が(堀の可能性もある)をともなつて ずっと維持されながら出現してゆく。

特に超大型建物1は縄向遺跡第166次調査の超大型建物(238.08m)に次ぐ日本列島屈指の規模であり、稲部遺跡の首長はヤマト王権下でさらに勢力を伸ばし、当時日本の物流の結節点 近江にあって、当初の鉄器供給基地から「鉄」のみならず、物流拠点として ヤマト王権とともに歩んだのであろう。この稲部の北にある荒神山山頂部には4世紀末の巨大な初期前方後円墳があり、この稲部の首長の墓ではないかと考えられている



稲部遺跡の中心部に建つ超大型建物のイメージ図

いままで、この地の重要性 そしてここを拠点とする勢力が取り出されたことはないが、稲部遺跡の出現によって、大きくこの地がクローズアップされることとなった。

3.3. 発掘調査域から出土した遺物 日本各地の土器片 & 鍛冶関連遺物

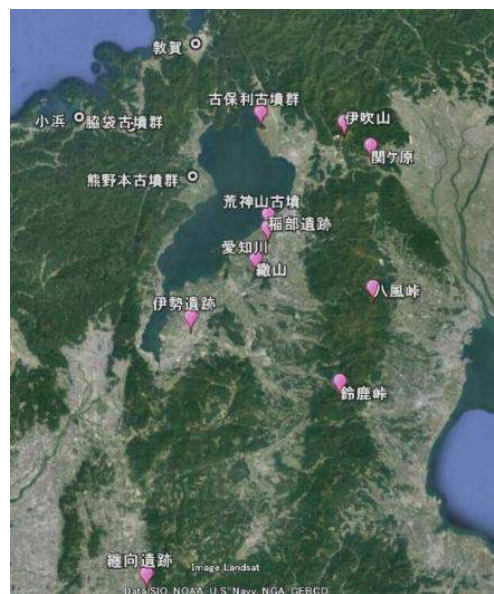
1. 土器と土器片

大和・伯耆・越前・湖南地域・美濃・尾張・伊勢・東遠江から駿河の土器土器片が出土していることから、交流の要、物流の中心地であったことが、裏付けられる。朝鮮半島の渡来人との関係を示す乾式時も出土している。

これらの各地の土器片の出土と近江・伊部遺跡の地理的な位置づけを考えると、「北陸や美濃・尾張などの東日本方面と畿内の大きな地域をつなぐ、地理的に重要な位置にある3世紀の近畿北部の中心的集落」としての姿がここからも見えてくる。



出土した日本各地の土器・土器片や韓式土器



2. 鍛冶遺物

鍛冶関係の遺物については 現地説明会の資料には全く触れられていないが、現場には箱に詰めて整理された鉄滓や鉄片 鍛冶具などがぐんじされていました。 詳細はよく判りませんが、 新聞では 次のように報道されている。

鉄器工房は30棟以上ある竪穴建物群で、各棟は一辺3.5～5.3メートルの方形。

うち23棟の床面から鉄片や鉄塊が見つかった。

一部に土なども含んだ状態だが、全体の重さは計約6キロに上る。

同時に鍛冶や鉄を加工する際に使った台石や、鉄製矢尻2個なども見つかった。

また、稲部西遺跡で青銅製の鋸や稲部遺跡の二次調査で棒状の青銅や青銅製品を鋳込む鋳型の外枠が見つかっており、青銅器の生産にもかかわっていたとみられるが、詳細は不明である。

稲部遺跡から出土した遺物展示

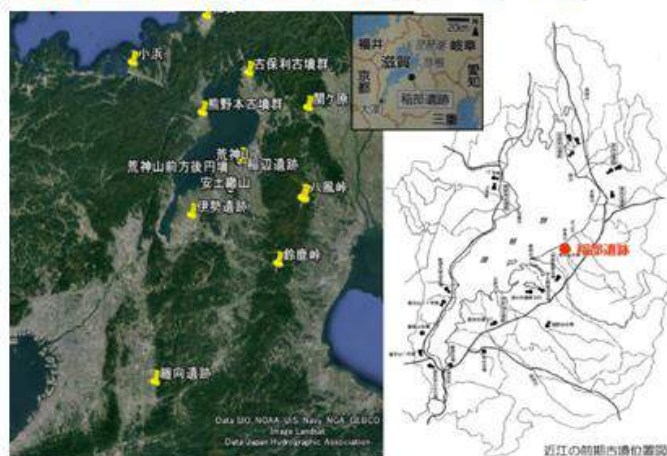


7次調査区の鍛冶工房跡周辺から出土した鍛冶関連遺物
鉄片・鉄鏃・鉄滓・たたき石・台石など

西暦		時代	日本（倭）のできごと	朝鮮半島のできごと	中国・朝鮮半島のできごと
100		107	倭国王純升が後漢に朝貢する。		和帝 安帝
150		弥生時代 後期	このころ倭国乱。 このころ卑弥呼が共立される。	伊勢道師（守山市の大遺跡）伊勢宮を造る。銅鐸 銅甕も使われていく時期です。	順帝 後漢 熹帝
200		239	卑弥呼が魏升米らを魏に派遣する。	竪穴建物による集落が継続し、集落の西側で周溝付建物 が出現する。（大和東南部で周溝遺跡が出現する。）	184 賁の乱。 190 遼東太守公孫度が自立を強める。 204 公孫度が新野を占領する。 208 曹操と劉備、孫権との赤壁の戦い。
250		240	帯方郡からの使者が倭国に派遣される。	北端では独立様式建物（櫓形施設）と金属器工部 （鉄器生産と青銅器鑄造）が出現する。	文帝 220 曹氏が皇帝となり、魏を興す。 221 劉備が皇帝となり、蜀を興す。 222 孫権が皇帝として、呉を興す。
		243	卑弥呼、病いを通る。邪馬台国と狗奴国との戦い。	竪穴建物から周溝付建物へ。北端では 独立様式建物によるマツリ場が現れ、北端では 集落の竪穴建物群の一面で大規模な鉄器生産が行われる 多数の竪穴建物群による集落が継続し、南側では方形区 画（周溝や櫓形施設の可能性）と独立様式建物が見える。 方形区画南側の大規模な鉄器生産は最盛期を 迎える。	明帝 234 魏と蜀の五丈原の戦い。 236 遼東の公孫淵が病を興す。 238 魏が公孫淵を滅ぼす。
		247	卑弥呼、病いを通る。		3国 （魏・蜀・呉）
		248	このころ卑弥呼が亡くなる。再び戦乱が起こる。 香寿が女王となる。		260 蜀が滅びる。 265 司馬懿が西晋を興す。
		256	香寿が西晋に朝貢する。		武帝 260 西晋が呉を滅ぼし、中国統一する。 301 八王の乱が始まる。華北混戦。 313 慕容皝が後燕を建て、華北を統一する。
300		古墳時代 前期	この時代、こんなに大さな建 物のある遺跡は珍らしい！ クニの中心部で、地域の有力 者がいたこと、地味な土器も 珍らしい。	弥生による方形区画のあった場所、新たに櫓による区画 を伴う巨大型建物（屋敷の可能性）が出現するとも な、北側では大さな独立様式建物（櫓形施設）が建 その後、巨大な倉庫が建てられる。	西晋 孝惠帝
350		古墳時代 前期 有雷式期	367	西晋の使者が倭国に派遣される。	倉庫の中には何かが？物流センター だったんだね！
400		413	倭王璿が東晋へ使いを送る。	掘立柱建物による集落が継続し、大溝が掘削される。朝鮮 半島の土器（百濟の陶質土器など）がもたらされる。 荒神山古墳（大型前方後円墳）が築造される。	東晋 謝安
450		古墳時代 中期	425 倭王璿が宋へ使いを送る。 438 倭王璿が宋へ使いを送る。 443 倭王璿が宋へ使いを送る。		國外との関係も？！
500		500	478 倭王武が宋へ使いを送る。	五斗山古墳は国指定史跡。 どうして五斗山に大古墳 が作られたの？どうして？ 跡だとしてどんな王が眠っ ているの？ 周溝付、わくわくする歴史 でいっぱい。	宋 齊 梁

参考1 荒神山と荒神山古墳と稲部遺跡

稲部遺跡のすぐ北にあり、琵琶湖交通の目印でもある荒神山には4世紀末 ヤマトと同じ方式で築かれた前兆124mの大きな前方後円墳がある。琵琶湖交通・東国・北陸と畿内を結ぶ要衝 近江稲部の地にあって鉄の交易などの物流を握っていた近江の大勢力の首長の勢力圏にある荒神山。この地に強い勢力があったとは考えられていなかったが、物流拠点を握る大都市集落がペールを脱ぎ、そして その地に前方後円墳の存在。この稲部の首長がヤマト王権と密接に結びついて重要拠点を握っていたと考えることをよく示しており、日本の国造りに新しい視点を提供する。



荒神山古墳は、彦根市の西方、琵琶湖岸に近い湖東平野の独立丘である荒神山（標高 284.1m）の山頂から、北へ約 150m下った尾根頂部に位置しています。彦根市教育委員会では、平成 15 年度～平成 19 年度にかけて4度にわたり、古墳の範囲確認を目的とする発掘調査を実施しました。調査の結果、荒神山古墳が全長 124mを測る前方後円墳（ぜんぽうこうえんぶん）であること、築造時期は古墳時代前期末（4世紀末）であること、墳丘は礫石（ふきいし）で覆われ、前方部・後円部とも3段に築かれていること、各段のテラスには通溝（はにわ）が巡っていたことなど、重要な発見が相次ぎ、平成 23 年2月に国の史跡指定を受けました。本市では「彦根城跡」「彦根藩主井伊家墓所」に次いで3件目の国史跡となり、彦根市西部地域では初めての指定となります。



◆ 古墳の規模 ◆

荒神山古墳は、主軸を北北西―南南東に置き、前方部を北西に広がる琵琶湖に向けた前方後円墳です。古墳の各部位の計測値は次のとおりです。

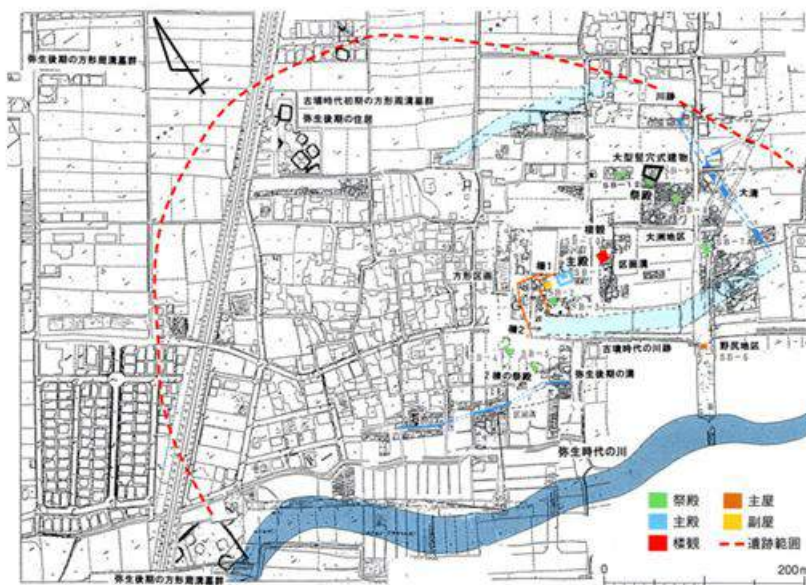
全長：124m	前方部長：約 53m	後円部径：約 80m
	前方部長：約 61m	くびれ部幅：約 52m
	前方部高：約 10m	くびれ部高：約 9m
		後円部高：約 16m

◆ 国史跡 荒神山古墳 彦根市教育委員会

https://www.city.hikone.shiga.jp/cmsfiles/contents/0000003/3477/21_kojinyama_kofun.pdf

参考2. 弥生時代後期の巨大祭祀空間を有する巨大都市集落 守山市伊勢遺跡

彦根の伊部遺跡に先立って、弥生時代後期（1世紀～2世紀）近江に纏向に匹敵する大型建物や巨大祭祀空間を有する巨大集落遺跡「伊勢遺跡」が琵琶湖交通や畿内交通の要衝 守山市の琵琶湖岸近くに成立していた。そして、この伊勢遺跡の衰退と入れ替わるがごとく、大型建物と巨大祭祀空間を有する彦根の稲部遺跡が繁栄してゆく。



この伊勢遺跡も野洲川が琵琶湖にそそぐ、琵琶湖交通並びに東国・北陸や畿内と伊勢・西国を結ぶ交通の結節点に存在した都市集落遺跡である。

私も2012年と2013年に邪馬台国の候補地の一つとして、話題になったときに訪れたことがある。

この伊勢遺跡の詳細は下記インターネットにありますので ご参考に。

NPO法人 守山弥生遺跡研究会 発掘された弥生の王国

弥生時代後期の巨大政治祭祀空間を有する国史跡「伊勢遺跡」

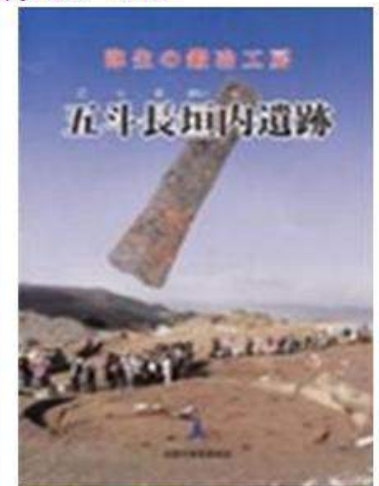
<http://ise-iseki.yavoiken.jp/index.htm>

参考3 弥生終末期の鉄交易拠点の都市集落 稲部遺跡

その都市集落内にある工場 鍛冶工房群ではどんな鉄器生産が行われていたのだろうか？

弥生時代後期の鍛冶工房村 淡路島五斗長垣内遺跡

鍛冶工房イメージ図



西に瀬戸内海を見下ろす標高200メートルの尾根上に見つかった弥生時代後期日本最古最大級の鍛冶工房村

淡路島「五斗長垣内遺跡」現在は住民の手で整穴建物が復元されている

淡路島 五斗長垣内遺跡にみる弥生時代の鉄器生産 淡路市教育委員会 伊藤宏幸氏講演 より 2016.5.28.

「五斗長垣内遺跡にみる弥生時代の鉄器生産 -発掘調査と実証実験で見えてきたこと-」

淡路市教育委員会伊藤宏幸氏講演 2016.5.29.大阪弥生文化博物館で

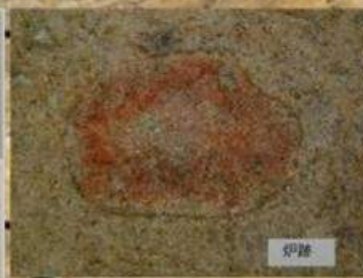
今回の講演 弥生後期の五斗長垣内遺跡では すでに高温鍛冶が行われていた可能性を示唆

伊藤宏幸氏は今回の講演で、再現鍛冶作業実験・体験鍛冶作業から、五斗長垣内遺跡の鍛冶加工について 次のように講演

1. 羽口がなくても、周辺の材料(蓮の茎・竹等)で容易に代用品を作り、送風が可能である
2. 送風を行うことで、遺構の炉床に見られたのと同じような1200度以上の維持された高温部が鍛冶炉内に得られる
3. 住居内から大量に見つかり、用途不明だった小粘土塊が代用羽口先端部の耐熱保護材の可能性の可能性がある。
4. この再現鍛冶炉を用いた鉄素材として五寸釘 石器による鍛冶工具を用いた体験実習で、

小型鍛冶工具製作が可能であり、かつ 炉中の素材鉄くずが相互に融着する場合があるなど

鉄素材がまだ 明確ではないものの 鋳切り加工よりも高温鍛造加工がすでにや行われていた可能性を示唆した。



弥生後期 最古・最大級の鍛冶工房村

淡路島五斗長垣内遺跡

出土した鍛冶炉は掘り込みがない炉床構造、羽口が見つからぬことや大型鉄製品は、「板状鉄斧」と呼ばれる鉄製の斧と確認された。また、出土鍛冶工具は石器であり、鉄鋸など小型鉄製品と数多くの裁断片が出土。五斗長垣内遺跡の鍛冶加工は従来の弥生時代の鍛冶の常識に沿い、「高温を必要とせぬ鋳切り加工」が主の鍛冶工房とみられてきた。

4. まとめ 稲部遺跡 発掘調査 平成28年現地説明会に参加して



2016.10.22 卑弥呼の時代 ヤマトと琵琶湖交通・東国を結ぶ結節点近江に

卑弥呼の時代 ヤマトと琵琶湖交通・東国を結ぶ結節点近江に

「大和の纏向遺跡に匹敵する大型建物を持つ 鉄の物流拠点とみられる 都市集落(彦根市稲部遺跡)」が出土の報に興味津々で出かけました。

大型建物のすぐそばには、繰り返し継続して建て替えられた多数の鍛冶工房とみられる竪穴住居群が密集する鉄器物流を担う近江の拠点集落で、初期ヤマト王権に組み込まれて、さらに発展してゆく。

大陸の「鉄」の覇権が卑弥呼・初期ヤマト連合をむすびつけ、日本の国づくりが進む。

日本の国造りにがかかわっていた鉄の現場に立つことができ、満足感いっぱい。

都市集落の中心 巨大建物が建つ方形区画を取り囲むように数多くの鍛冶工房関連の住居が建ち並んでいるなど想像もつかなかった。まさに鉄が主役の都市空間。



卑弥呼の時代鉄交易の拠点都市集落近江「稲部遺跡」の中心部にあった鍛冶工房群跡 2016.10.22



弥生後期 淡路島五斗長垣内遺跡
鍛冶工房内の鉄器加工イメージ図

卑弥呼の時代 掘っ立て柱建物を取り囲んで鍛冶工房が密集していた 稲部遺跡の中核部第7次調査区

ここで どんな鉄のドラマが演ぜられたのだろうか??

残念ながら、鍛冶炉は出土せず、これらの鍛冶工房でどんな鉄づくりが行われていたかは全く不明のままであるが、卑弥呼の時代そして 初期ヤマト王権へとつながる日本の国造り。「鉄が主役」を実感することができてました。また、この稲部遺跡の役割 そして 日本の国造りにかかわった鍛冶工房の鉄づくりの検討はまだこれから。

でも また 一つ 卑弥呼の時代がバールを脱いだ。

夕闇迫るまで遺跡の中において、色々思いをはせつつ、 北に荒神山 南に安土織山 そして今まで何度も出かけてきた近江・琵琶湖を思い浮かべながら、これからの展開に期待いっぱい JR 稲枝駅へ 帰ってきました。

車窓より夕暮れの近江平野を眺めながら

2016.10.22.夕 by Mutsu nakanishi

参考資料

1. 平成28年度稲部遺跡発掘調査現地説明会資料 2016.10.22 彦根市教育委員会
<http://www.city.hikone.shiga.jp/0000009271.html>
2. 国史跡 荒神山古墳 彦根市教育委員会
https://www.city.hikone.shiga.jp/cmsfiles/contents/0000003/3477/21_kojinyama_kofun.pdf
3. 弥生時代後期の巨大政治祭祀空間を有する国史跡「伊勢遺跡」 NPO法人守山弥生遺跡研究会
<http://ise-iseki.yayoiken.jp/index.htm>
4. 稲部遺跡に関する 2016.10.18 各社新聞報道

《 参考 関連和鉄の道・Iron Road by Mutsu Nakanishi 》



1. 「卑弥呼の邪馬台国」の候補地を訪ねる【1】 2012.11.21.& 2013.2.11.
東近江 野洲川南の湖岸近く弥生後期の大集落 守山市伊勢町「伊勢遺跡」を訪ねる
魏志倭人伝の記述《卑弥呼の居処は「宮殿・祭殿」・楼閣・城柵》すべてがそろった弥生後期の大集落
<http://www.infokkna.com/ironroad/2013htm/iron9/1303iseiseki.pdf>
2. 日本初の都市の出現 纏向遺跡を歩く 2012.7.24 & 8.23.
<http://www.infokkna.com/ironroad/2012htm/iron8/1209makimuku00.htm>
3. 古墳時代 朝鮮半島との交流玄関口「若狭」を再度訪ねる 2011.8.30.
脇袋古墳群など若狭の王墓からの出土品見学 & 若狭小浜港・遠敷(おにゅう)の里 Walk
<http://www.infokkna.com/ironroad/2011htm/iron7/1110wakasa00.htm>
4. 北近江安曇川安曇あずみ会でのプレゼンスライド 2011.12.1
「和鉄の道Iron Road」から見た日本誕生前夜-北近江・若狭が輝いた時代-
<http://www.infokkna.com/ironroad/2011htm/iron7/1112adogawa/1112adogawa.html>
5. 大阪弥生文化博物館2016年春季特別展第3回考古学セミナー聴講 まとめ②
「淡路島 五斗長垣内遺跡にみる弥生時代の鉄器生産-発掘調査と実証実験で見てきたこと?-」.
弥生後期の五斗長垣内遺跡ではすでに高温鍛冶が行われていた可能性を示唆
淡路市教育委員会 伊藤宏幸氏講演 2016. 5.28.
<http://www.infokkna.com/ironroad/2016htm/iron12/1607awaji00.htm>